



大潟村から世界へ「とりっこフレンズ」 ～村の野鳥を4コマ漫画や写真・動画で発信～

畠山 佳枝

(大潟村地域おこし協力隊)

○ 大潟村地域おこし協力隊になったきっかけ

私は埼玉県出身で、桑沢デザイン専門学校を卒業後、東京で約14年間WEBや紙のデザインの仕事に従事していました。30代半ばに差し掛かった頃、家族を持ちたいという思いが強まり、退職を決意しました。その後、子供も生まれ、家族4人での生活が始まりました。

しかし、2020年に世界を襲った新型コロナウイルスの影響で、生活は一変しました。夫の両親のご厚意で、秋田県の実家へ一時的に避難することになりました。ちょうど子供が幼稚園に入園するタイミングで、緊急事態宣言が発令される前に秋田に来られたことは幸運でした。当初はコロナが収束したら東京に戻る予定でしたが、秋田の豊かな自然と穏やかな生活環境に魅了され、そのまま住み続けたいと強く思うようになりました。

野鳥観察が趣味の私は、毎日のように海や山、田んぼで様々な鳥を見つけることができる秋田に魅了されました。東京では軽井沢まで見に行っていたミソサザイを、秋田では車で5分の公園で観察できました。また、ヒレンジャクやマガン、オジロワシなど、初めて見ることもできた野鳥もたくさんいました。秋田県内の探鳥地を調べるなかで大潟村を知り、何度か訪れるうちに、その広大な干拓地と野鳥の種類と数の多さに心惹かれ、「ここに住んで、野鳥の魅力を伝える活動ができたら」と考えるようになりました。

2022年末、子供が小学校に上がるタイミン

グで、これまでのデザインの経験を活かしつつ、野鳥に関わる仕事をしたいと考え、大潟村の地域おこし協力隊に応募しました。大潟村では自由な企画提案型の募集があり、企画が採用され任用いただけました。家族とともに新しい生活をスタートさせることに、大きな期待と少しの不安を抱きつつ2023年3月に着任しました。今年9月で1年半が経過し、現在、3年任期の協力隊活動は後半に入っています。



(ミソサザイ)

(ヒレンジャク)

○ 1年目

着任後すぐに、地域おこしの具体的なプランを練り始めました。野鳥の魅力を広く伝えるためには、子供や鳥にあまり関心のない人々にもアプローチする必要があると考え、イラストや4コマ漫画で訴求する「とりっこフレンズ」を立ち上げました。親しみやすいキャラクターや4コマ漫画を通じて、野鳥や自然環境への興味を喚起し、ファンや関係人口を増やすことを目指しました。

主な活動として、SNS（Instagram・X）で4コマ漫画や写真、動画の投稿を行い、村のイベントではブース出展や「とりっこあつめ」というスタンプラリーを開催しました。初

回のスタンプラリーには70名を超える方に参加いただき手応えを感じました。SNSは日本だけでなく海外からのフォロワーも増え、特に女性からの支持が高まりました。

3月には1年分の漫画を冊子にまとめ、村の全戸に配布しました。さらに、近隣の道の駅や観光案内所にも置くなど、観光客にも手に取ってもらえるよう工夫しました。活動は地元メディアにも取り上げられ、SNSのフォロワー数が飛躍的に増加するなど、大きな反響を得ることができました。



(とりっこフレンズ)



(4コマ漫画)

大潟村は人工の干拓地で、周囲は水路に囲まれ広大な農村が広がり、池や湿地、防風林が作られています。そのような環境で絶滅危惧種の希少な野鳥のチュウヒやオオセッカ、コジュリンなども生息する特別鳥獣保護区があり、観察小屋も設置されています。野鳥を観察しながら保護して守ってきた歴史も大まかにですが知ることができた1年目でもありました。

○ 2年目

1年目の成果を基に、活動の幅をさらに広げました。SNSでは海外フォロワーも多いため（毎回ではないですが）英語表記での発信も始めました。夏休みにはホテルサンルール大潟のロビーでミニ4コマ展示を行い、グッズ販売やアンケート収集にも取り組みました。アンケート結果を基に、これから冬に宿泊するお客様に向けて、何か企画提案ができればと考えています。

また、公民館では4コマ漫画講座を開催し、地域の子供たちと交流を深めました。絵の多いスライドを用意し、特典として参加者が制作した漫画を印刷会社で冊子化し、プレゼントしました。好評を得て、「また参加したい」という声が多く寄せられました。ただ、小学校低学年の子には内容がやや難しく、その場でストーリーを考え4コマの絵を作るのも難易度が高いという印象でしたので、改善とプラスアルファをして次に繋げられればと思っています。

これらの活動を通じて、地域の皆さんとの信頼関係も築かれてきました。近頃は、村の子供たちに「とりっこの人だ!」と声をかけられることも増え、地域のキャラクターコンテンツとして「とりっこフレンズ」が浸透してきたと実感し、大きなやりがいとなっています。

9月には、SNSのXで投稿した「カワセミ

「V S 毛虫」の動画が1日で80万回再生され、1万「いいね」を獲得しました。ネットニュースサイトの「ねとらぼ」で記事になり、ヤフーニュースなどにも掲載されました。



(4コマ漫画講座の様子)



(カワセミVS毛虫)

これらは、いずれも四季折々の様々な野鳥がほぼ毎日見られる、野鳥の宝庫大潟村だからこそできることです。大潟村は年間270種もの野鳥が観察された場所で、数も多いです。鳥の他にもトンボや蝶々、カブトムシなどの昆虫や、水辺・水路には魚がいて、独自の生態系が育まれています。大潟村は、唯一、人工の干拓地の

中に単独の自治体があるというとてもユニークな土地です。さまざまな場所から入植された方たちで作られた村であり、人も鳥も魅力的な土地であることは間違いありません。

○ 3年目と退任後の目標

今年は県内のいろいろなイベントにも呼んでいただきました。県外のイベントにも出展し、とりっこフレンズで大潟村の野鳥をPRしながら、自分自身も楽しんでいます。

大潟村での活動を定着させ、持続可能なものにするため、グッズ販売や4コマ漫画の展示を秋田県内や東京にも展開したいと考えています。これにより、地域の魅力を広く発信し、観光促進や地域ブランドの向上に寄与できると期待しています。

メインとなる漫画の制作も、月に2件以上のペースで継続し、質と量の両面で充実させていきます。退任後の収益化を視野に入れ、YouTubeチャンネルの開設やSNS「X」での有料プランの導入も検討しています。また、著名なバードウォッチャーである「♪鳥くん」を招いて、野鳥観察ツアーやトークイベントの開催も検討しています。色々なグッズを増やし、手軽に子供も購入できる100円ガチャガチャを地元や東京の秋田アンテナショップに設置することも考えています。

10月1日、大潟村は60周年を迎えました。これを機に大潟村のジオスポットや、お米、玉ねぎなどの特産品、お花、桜と菜の花ロードなど名所を紹介する4コマ漫画も11月から始めます。年度末には1年分の漫画プラスアルファの形で冊子にする予定です。

加えて、当初からの目標である3年分の漫画を本にしたいと考えています。できれば出版社に売り込みをして書籍化できれば嬉しいですが、

難しい場合でも、いずれは必ず作りたいと思っています。

野鳥観察では鳥、環境、その土地に住むひとなどに配慮した観察や撮影が大切です。マナーや環境を守り大潟村でも他の場所でも野鳥観察を楽しんでいただけるような活動にも微力ながらも寄与できればと思います。

退任後は、引き続き4コマ漫画を描いて、SNSやYouTubeで国内外へ配信して村やとりっこフレンズをPRするとともに、イベント参加や講座の開催など、少しでも収入につなげられるコンテンツを増やしていきたいと思っていますので、お声をかけていただければ大変嬉しいです。

任期の3年に加え、退任後も活動が続けることで、大潟村の魅力を全国・海外に発信し続けたいと思っています。大潟村がさらに多くの人にとって「訪れたい、住みたい」と思える場所になることを目指して、失敗を恐れず、挑戦を続け一步一步進んでいきたいと考えています。

【とりっこフレンズSNS】

<Instagram>

<https://www.instagram.com/torikkofriends/>

<X>

https://x.com/torikko_friends



(とりっこフレンズ100円ガチャガチャ)



(とりっこフレンズ4コマ漫画冊子)

<担当者から一言>

今回寄稿してくれた畠山隊員・佐藤隊員は、それぞれ違う角度から“地域おこし”というミッションに携わっていて、異境の地で日々がんばってくれています。

そんな二人は、それぞれ「自然が大好き」、もっと言えば「野鳥が大好き」という点で共通しています。二人が野鳥に対して夢中になる姿や、SNSの投稿を身近にしていると、「大潟村の野鳥って、それほど魅力があるんだな」と気付かされます。

長く住んでいると当たり前を感じる物事でも、移住者や村外の方から見ると宝の山だったりするのかもしれません。

まだまだある大潟村の隠れた魅力を、地域おこし協力隊のみなさんの力を借りながら発掘し、情報発信していけたらと思います。

(大潟村総務企画課 池田 龍成)